

「水辺活動体験が小学生の海洋リテラシーに及ぼす影響」

0914036 彦坂 俊博 (海洋スポーツ・海洋健康科学研究室)

I. 研究目的

2002年度から実施された新学習指導要領の中で、総合的な学習の時間において「自然体験」が具体的に明記された。これまでに水辺活動における生きる力の向上効果を検証した研究はみられるが、海洋リテラシーに関する研究は行われていない。そこで本研究では、居住地域の異なる小学生における海洋リテラシーの比較・検討を行うとともに、水辺活動体験を行った小学生の体験前後における海洋リテラシーを比較することとする。

II. 方法

【調査1】 居住地域の異なる小学生における海洋リテラシーの比較（以下 調査1）

居住地域の違う2校の小学生に対し、子供版海洋リテラシー調査票を用いて質問紙調査を行った。子供版海洋リテラシー調査票は27項目・9つの下位尺度で構成されている。対象者はO小学校38名、S小学校103名である。

【調査2】 水辺活動体験前後における海洋リテラシーの比較（以下 調査2）

水辺活動の実施前と実施後に、子供版海洋リテラシー調査票を用いて質問紙調査を行った。対象者はS小学校103名である。

III. 結果・考察

調査1では9つの下位尺度のうち3つの下位尺度「船に関わる知識と技術」($t=2.67$ $p<0.05$)、「海での現象と危険性について説明する力」($t=3.87$ $p<0.001$)、「海との関係について説明する力」($t=3.57$ $p<0.01$)及び、27項目のうち9項目において有意差が認められた。3つの下位尺度全てにおいてO小学校がS小学校より有意に高かった。これは、周辺地域の違いによるものと考えられた。調査2では9つの下位尺度のうち3つの下位尺度「海の必要性についての理解」($t=2.63$ $p<0.05$)、「海での現象と危険性について説明する力」($t=3.03$ $p<0.01$)、「海との関係について説明する力」($t=3.49$ $p<0.001$)及び、27項目のうち7項目において有意な向上が認められた。これは、実際に水辺活動体験を行ったことにより海洋リテラシーが向上したためであると考えられた。

IV. 結論

調査1では、地域差があるために、居住地域の異なる小学生の海洋リテラシーには違いがあると示唆される。今後は異なる地域でのデータ収集を進めていく必要があると考えられる。調査2では、水辺活動体験は海洋リテラシーの向上に関与していると示唆される。今後は様々な地域や年齢を対象としたデータ収集や、様々な事業における海洋リテラシーの変容に関するデータ収集を行っていく必要があると考えられる。

主な参考文献

久保和之ら (2003) 「海洋性キャンプ参加者の海浜活動体験とプログラム満足」『海の自然体験活動による新しい感動と発見をⅡ—海の自然体験活動研究会報告書』・131～137P

窪郷尚代ら (2012) 「海辺の体験教育が参加者に及ぼす教育的効果に関する調査研究」『SSF スポーツ政策研究抄録』第1巻1号